

## 写真人とその本 22 / 菊池眞一

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

菊池眞一<sup>まきちしんいち</sup>（1909-1997）は、父親の恵次郎が社長をつとめていた東洋乾板（後に富士写真フィルムへ合併）にて感度測定法などを学び、1933年に東京帝国大学工学部応用化学科を卒業しました。パリ大学留学後、東京帝大大学院で大学時代からの恩師である亀山直人教授の指導により、写真の現像機構について研究をはじめました。その後東京大学第二工学部教授、生産技術研究所所長などをつとめ、1970年には東京写真大学（現：東京工芸大学）学長に就任しました。また、日本写真学会、日本写真協会などの会長を歴任しながら、写真科学の研究と技術者育成に尽力し、

1981年には勲二等瑞宝章を受章しました。1957年にはパリ大学都市日本館館長をつとめるなど、日仏の交流にも貢献しています。

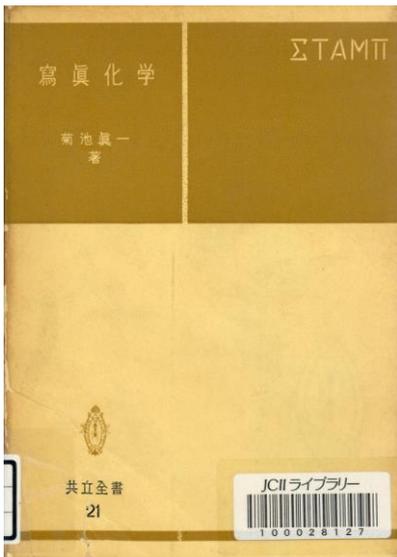
1952年には共立出版から『写真化学』を刊行しました。本書は写真感光層の構造に始まり、光化学反応、現像理論、写真に関する諸現象、ゼラチン、天然色写真など全16章で構成されています。1959年の「改訂版」では冒頭に緒論「写真の用途と工業」を加え、近説の更新や新しい写真薬品の説明など大幅な内容変更と項目追加を行っています。さらに1968年にはカラー写真など、進歩に伴って採用された技術に関する記述を加えた「新版」と、著しい発展に併せて内容をアップデートしています。

雑誌では、『カメラ毎日』の1954年6月創刊号から1年間「今月の写真科学」を、1957年5月号から11月号までは「パリ通信」を5回、1960年2月号から12月号まで「写真の科学」を連載しています。『写真工業』では、1973年5月号から1974年2月号まで「写真随想」を9回担当し、写真科学の先駆者や非銀塩写真などについて記しています。

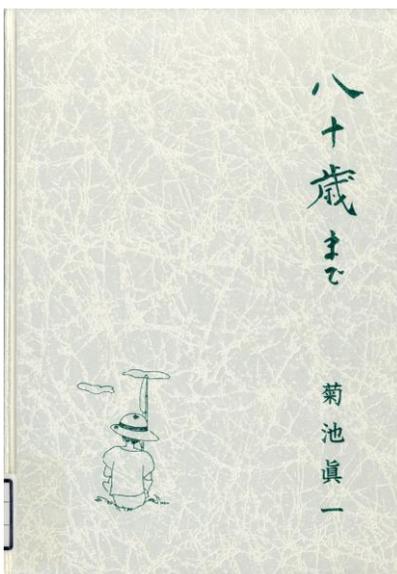
また実用書として、『現像の理論と実際』（共著、アルス・1950年）、『最新写真処方ハンドブック』（共著、アミコ出版社・1955年）、『科学写真便覧』上、中、下（共著、丸善・1959～64年）、『すぐに役立つ写真技術』（南江堂・1963年）などを執筆したほか、『光学技術ハンドブック』（朝倉書店・1968年）では、「写真技術」の項目編集を担当するとともに「写真材料の特性」を寄稿しています。

1994年には『八十歳まで』を自費出版しました。自叙伝として、生い立ちや、研究活動などを通して交流した人物と出来事、家族、友人、師弟について記しています。

永年に亘り日本の写真科学分野をリード続けた菊池の著述からは、そのまま同分野発展の流れを見ることができます。



『写真化学』



『八十歳まで』